

春季全国火災予防運動 3月1日(金)～7日(木)

「忘れてない? サイフにスマホに火の確認」

●春先は火災が起きやすいシーズンです!

春は、冬に比べると、全国的に空気が乾燥しやすくなります。春一番のように強い南風が吹く季節でもあり、ひとたび火災が発生すると被害が大きくなりやすいので注意が必要です。

また春先は、農作業のために外で火を使う活動が始まる時季でもあります。気象条件をよく確認し、強風が予想される場合には行わないようにしましょう。

家庭ゴミ等を燃やす「野焼き」は法律で禁止されていますので、**絶対に行わないでください。**

【問い合わせ】ひたちなか・東海広域事務組合消防本部予防課(☎271-0735)



村火災予防ポスターコンクール最優秀作品

石神小学校6年
大坪 万里菜さん

(春季啓発ポスター)

ふるさと歴訪
〜歴史を再発見〜

東海村民の戦場体験

日中戦争からアジア・太平洋戦争期にかけて、水戸連隊区で召集された旧村松村と旧石神村の村民は、東アジアから東南アジア、太平洋各地に至るまで、さまざま地域へと出征しました。現在の東海村域からどれほどの人数が出征したのかは定かではありませんが、苛烈な戦闘と、過酷な戦場生活の中で、旧村松村で161人、旧石神村で140人、合計301人が戦死したとされています。

『東海村史・通史編』(1992年、648ページ)の「地域別戦没者数」の表によれば、戦没者が最も多かった地域がニューギニアで52人、2番目が比島(フィリピン諸島)で38人、さらに内地の28人、中国の25人、ビルマの23人と続いています。ニューギニアでの犠牲者がひとときわ多いことが分かります。

ニューギニア島には1942年から44年にかけて多数の軍人・兵士が投入されましたが、連合軍の猛攻を抑えることは



【戦没者村葬】

できず、制海・制空権を奪われて、日本軍は孤立を余儀なくされました。同地に投入された陸軍の第18軍では、合計約10万人が戦死しましたが、そのほとんど(約9万人)が餓死であったとされています(吉田裕『アジア・太平洋戦争』岩波書店、2007年、135ページ)。第18軍には茨城県民を多く含む第51師団が所属していたので、その中には、東海村から出征していった人も含まれている可能性が高いです。

村からはるか遠く離れた南方の戦地で亡くなった方々の心情がどのようなものであったのか、想像するのは容易なことではありません。『東海村と戦争』という、生涯学習課が制作した戦争体験者の証言を収めたDVDがありますが、その中で証言者の1人が、自らの戦場体験を「言葉に言い表せない」と表現されていました。

戦争体験者がいよいよ少なくなる中で、その体験の重みを改めて受け止めていかなければならないと思います。

茨城大学人文社会学部准教授

佐々木 啓